様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　６ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００１１５

研究課題名（和文）ギリシア教父の『雅歌』解釈における欲求・身体・自己論の変容史研究

研究課題名（英文）Soul's Desire, Body, and Self in the Interpretation of the Song of Songs

研究代表者
土橋　茂樹（Tsuchihashi, Shigeki）

中央大学・文学部・教授

研究者番号：８０２０７３９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：旧約聖書の中で赤裸々に男女の恋愛を歌った異色の書『雅歌』を、神との神秘的合一への道行きの書として高く評価するオリゲネス出自の解釈伝統が、いかなる神学的、哲学的影響の下にどのような変容を被ったかを、古代末期の哲学諸学派とギリシア教父双方の文献において、検証・考察することができたこと、またその際、知性を超えた不可知の神との合一における欲求、情念、身体性のもつ本質的意義の再評価への転換を明らかにし、欲求の訓練・身体の使用という意味での自己への配慮という新たな人間学構想への展開を哲学及び教父学の文献において跡づけられたこと、以上が本研究の主たる成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
神学／教父学／哲学の先行研究を領域横断的に再考することによって、身体に起因する欲求や情念を真の自己たる知性によって抑制するという従来の二元論的解釈図式から、知性を超えた不可知の神との合一における欲求、情念、身体性のもつ本質的意義の再評価がなされた点、さらには欲求の訓練・身体の使用という意味での自己への配慮という新たな人間学構想への展開として解明がなされた点が、本研究の最大の特徴であり、思想史研究上の意義である。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies the Christian traditional exegesis of the Song of Songs, which has not only long interacted creatively with, but more recently reacted critically against the allegorical interpretation developed by Origen of Alexandria. The essential point of this study is to show that desire, passion, and other bodily moments are part of the rational subject, and that the topic of desire shifts from a bifurcated anthropology (as reason vs desire) to an intrinsically unified, multi-layered, and dynamic anthropology, by interpreting Gregory of Nyssa’s Homilies on the Song of Songs.

研究分野：哲学・思想史

キーワード：『雅歌』　オリゲネス　ニュッサのグレゴリオス　愛　欲求　身体　自己への配慮

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的背景としては、(a)旧約聖書の諸書に収められた『箴言』『伝道の書』と並ぶ『雅歌』の解釈伝統の形成に寄与した教父たちの文献研究、(b)そうした解釈伝統の変容に少なからぬ影響を与えたギリシア哲学諸学派の魂／身体／欲求論の研究、さらに(c)「汝自身を知れ」以来の自己探求の系譜に関わる広範な研究の三種に分けられる。

(a)ヘブライ人の間でさえ徒に肉欲を刺激しかねない異色の書とみなされていた『雅歌』を、神との神秘的合一への道行きの書と最初に解釈し高く評価したのがオリゲネスの『雅歌注解』であり、その解釈を継承したニュッサのグレゴリオスの『雅歌講話』である。この両者の『雅歌』解釈の共通点と差異に関しては、F. Dünzl（1993）と A. Meredith（1995）の詳細緻密な論考が未だにスタンダードである。しかしその一方で、近年のグレゴリオス研究の深化に伴い、前者に主知主義的解釈傾向を配し、それとの対比で後者に霊的解釈を配すという従来の解釈図式にさらなる展開が求められている。すなわち、グレゴリオスの修徳の焦点が欲求の克服ではなくその訓練に向け変えられ、そのような欲求の訓練次第で魂の運動が悪しき情念にも徳にもなり得ることが強調される一方で（M. Hart, 1990；J. Behr, 1999）、「無情念」（aphtheia）でさえ情念や欲求の単なる否定ではなく、むしろその解放を意味すると解される以上（M. Ludlow, 2000）、欲求こそが人間知性の自己実現にとって不可欠の本質契機である（R. Williams, 1993）という方向での『雅歌講話』の再解釈が求められている。

他方、(b)ギリシア哲学において欲求は、プラトンの魂の三部分（理知的／気概的／欲望的部分）説によれば知性と対立するものとして、あるいはアリストテレスの魂の二分（理性をもつ／もたない部分）説によればあくまで思慮に導かれる限りで倫理的徳を形成するものとして規定されていた。対して、ストア派の理性（ロゴス）に一元化された魂論の場合、非理性的な情念や欲求をどう位置付けるかが課題となる。同様に身体の位置付けに関しても、心身二元論（プラトン主義）、可能態・現実態論（アリストテレス）、唯物論（ストア派）と立場が分かれることが確認されている。

しかるに(c) P. Hadot（1987）は、古代末期においてこれらの哲学的立場が総じて魂による善き生への訓練・生の技法としての機能面へと収斂した点に注目し、さらに M. Foucault（1988）はこれらの問題圏がソクラテスからギリシア教父とりわけグレゴリオスまでの間に「自己への配慮」という概念に集約されていたことに注目する。

２．研究の目的

本研究は、愛と欲求を本質契機とするオリゲネス出自の『雅歌』解釈の伝統が、グレゴリオス『雅歌講話』においていかなる神学／哲学的影響の下にどのような変容を被ったかを、古代末期の教父／哲学文献において検証・考察する。その際、**身体に起因する欲求や情念を真の自己たる知性によって抑制するという従来の二元論的解釈図式から、知性を超えた不可知の神との合一における欲求、情念、身体性のもつ本質的意義の再評価への転換を明らかにし、欲求の訓練・身体の使用という意味での自己への配慮という新たな人間学構想への展開を哲学及び教父学の文献において跡づける**ことが目的となる。

３．研究の方法

本研究は、以下の３年間の年次計画に基づいて研究目的を達成する。

【平成 31 年度の研究計画・方法】初年度は以下の 3 種の研究活動を行う。
①『雅歌』における愛の交流と肉的欲求の表層表現が、「神との合一」をテクスト深層において寓意的に表示するというオリゲネスの『雅歌』理解を、文脈ごとに具体的に検証しリストアップする。そのリストをグレゴリオスの『雅歌』解釈と逐一対照させることで後者の解釈に固有な論点を具体的に明示する。この考察結果が後続する諸研究の基礎資料となる。
②グレゴリオスの修徳主義（asceticism）における愛と欲求の位置付けを再検討すべく、彼の『純潔論』『人間創造論』を最新の当該 2 次文献と併読し、従来の知性による欲求抑制という解釈図式と詳細に比較した上で、新たな解釈枠の創出を試みる。
③プラトンにおける「自己への配慮」及び「身体の使用」の実相を解明すべく、各論点を『アルキビアデス』『カルミデス』の原典及び枢要な注釈書において重点的に考察する。
【平成 32 年度の研究計画・方法】次年度は以下の 3 種の研究活動を行う。
①グレゴリオスの『雅歌』解釈に固有な愛と欲求の理論をプラトン、アリストテレスのエロース論や魂論と比較考察し、そこに見出される双方の差異の源泉を古代末期のセネカ、マルクス・アウレリウス、プルタルコス、アプレイウスらのうちに追跡調査する。
②グレゴリオス『魂と復活』『人間創造論』に含まれる人間論を精査し、欲求が人間本性の完成に不可欠な本質契機であることを文献に即した形で解明・立証する。
③M. Foucault や P. Hadot の「自己への配慮」「生の技法」概念や G. Agamben の「身体の使用」概念などを用い、現代思想の観点からグレゴリオス『雅歌講話』を再考する。
【平成 33 年度の研究計画・方法】最終年度は以下の 2 種の研究活動を行う。
①オリゲネスからグレゴリオスに至る『雅歌』解釈の伝統をプロティノスから偽ディオニュシオスに至る神秘思想の文脈から再考することによって、東方教父思想において周知の否定神学的系譜とは異なる「愛と欲求の力による神との合一」思想の系譜として新たに跡づけ、神の本性よりもむしろその力と働きに着目した力動的な神学解釈の構想を立案する。
②前年度までの研究成果を踏まえて、絶えず欲求を訓練し身体を使用する非実体的な主体をみずからの自己を配慮し続ける力動的な生の超越論的源泉として哲学的に立論することによって、グレゴリオス『雅歌講話』を中心としたギリシア教父文献の新たな解釈としてのみならず、一般思想史における教父思想の位置付けをも刷新する契機としてその展望を開示する。

４．研究成果

これまでの思想史の叙述は、多くの場合、ギリシア哲学がヘレニズム期を経てすぐにアウグスティヌスへと継承されるが如き西方（ラテン）中心主義、ないしはラテン世界に対してビザンツ帝国をいきなり対比する東西二元主義の傾向が先に立ち、古代末期のギリシア教父の思想史上の位置づけが軽視されてきたきらいがある。その点、本研究においては、ギリシア教父たちによる『雅歌』解釈の変容史という観点から、旧約テクストがプラトン、アリストテレスからヘレニズム期の諸学派までのギリシアの学術伝統を介して、東方キリスト教的文脈において一体どのように変容・展開されたかが問題の核心となる。その限りで、神との神秘的合一という後代への影響力の極めて大きな神学的・哲学的主題の古代末期における変容史を具体的に文献学的に跡づけ解明するという、今まであまり語られることのなかったもう一つの思想史の系譜が浮き彫りにされた点が、一般的に見た限りでの本研究の最大の成果である。

より具体的には、**旧約聖書の中で赤裸々に男女の恋愛を歌った異色の書『雅歌』を、神との神秘的合一への道行きの書として高く評価するオリゲネス出自の解釈伝統が、いかなる**

神学的、哲学的影響の下にどのような変容を被ったかを、古代末期の哲学諸学派とギリシア教父双方の文献において、検証・考察することができたこと、またその際、知性を超えた不可知の神との合一における欲求、情念、身体性のもつ本質的意義の再評価への転換を明らかにし、欲求の訓練・身体の使用という意味での自己への配慮という新たな人間学構想への展開を哲学及び教父学の文献において跡づけられたこと、以上が本研究の主たる成果である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 土橋茂樹	４．巻 62
２．論文標題 「「枢要徳」概念の源泉と変容」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中世思想研究	６．最初と最後の頁 89-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土橋茂樹	４．巻 71 / 839
２．論文標題 「洞窟の比喩と神に似ること」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 白門	６．最初と最後の頁 42-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 土橋茂樹	４．巻 63
２．論文標題 書評：Roland Betancourt, Sight, Touch, and Imagination in Byzantium	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中世思想研究	６．最初と最後の頁 104-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 土橋茂樹
２．発表標題 プロクロスからバシレイオス・エウノミオス論争を経て偽ディオニュシオスへ ―神の名および流出と創造をめぐって―
３．学会等名 科研（研究代表者：小村優太）シンポジウム：プロクロスから東方キリスト教へ（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 土橋茂樹
２．発表標題 「枢要徳」概念の源泉と変容（シンポジウム特別報告）
３．学会等名 第68回中世哲学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 土橋茂樹
２．発表標題 『教父と哲学―ギリシア教父哲学論集』について
３．学会等名 書評会：アリストテレス、教父そしてマクダウェル ―信の哲学との対話（於北海道大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 土橋茂樹
２．発表標題 『善く生きることの地平』と『教父と哲学』について
３．学会等名 合評会：土橋茂樹著『善く生きることの地平―プラトン・アリストテレス哲学論集』 『教父と哲学―ギリシア教父哲学論集』（於東京大学）
４．発表年 2019年

１．発表者名 土橋茂樹
２．発表標題 カントの徳理論と徳倫理学の諸相（シンポジウム提題）
３．学会等名 日本カント協会第46回大会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計4件

1．著者名 土橋茂樹	4．発行年 2019年
2．出版社 知泉書館	5．総ページ数 438
3．書名 教父と哲学ーギリシア教父哲学論集	

1．著者名 土橋茂樹（編）	4．発行年 2020年
2．出版社 月曜社	5．総ページ数 245
3．書名 存在論の再検討	

1．著者名 伊藤邦武、山内志朗、中島隆博、納富信留編（共著者：土橋茂樹、他）	4．発行年 2020年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 288
3．書名 世界哲学史２	

1．著者名 神崎忠昭、野元晋編（共著者：土橋茂樹、他）	4．発行年 2020年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 312
3．書名 自然を前にした人間の哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関